**同題仙游觀　　　 同じくに題す**

仙臺初見五城樓　　　仙台 初めて見る 五城楼

風物淒淒宿雨收　　　風物 として 收まる

山色遙連秦樹晚　　　山色 遙かに連なる 秦樹の

砧聲近報漢宮秋　　　 近く報ず 漢宮の秋

疎松影落空壇浄　　　 影 落ちて く

細草春香小洞幽　　　細草 春 しくして 小洞 なり

何用別尋方外去　　　何んぞ用いん 別に 方外を尋ねて去ることを

人間亦自有丹丘　　　 た ら 有り

**和樂天早春見寄　　　楽天が早春に寄せらるるに和す**

雨香雲淡覺微和　　　雨はしく 雲は淡くして を覚ゆ

誰送春深入棹歌　　　誰か 春の深きを送りて に入る

萱近北堂穿土早　　　は 北堂に近くして 土をつこと 早く

柳偏東面受風多　　　柳は 東面にして 風を受くること多し

湖添水色消殘雪　　　湖は 水色を添えて 残雪 消え

江送潮頭湧漫波　　　江は を送りて く

同受新年不同賞　　　に新年を受けて 同じく賞せず

無由縮地欲如何　　　地を縮むるに　く せんと欲す

**和趙相公登鸛雀樓　の「に登る」に和す**

危樓高架泬寥天　　　危楼 高くかる たる天

上相閑登立綵旃　　　 に登り を立つ

樹色到京三百里　　　樹色 に到ること 三百里

河流歸漢幾千年　　　河流 漢に帰ること 幾千年

晴峰聳日當周道　　　 日にえて に当たり

秋穀垂花滿舜田　　　 花をれて に満つ

雲路何人見高志　　　 何人か 高志をす

最看西面赤闌前　　　最も看る 西面 の前

**凌歊臺**

宋祖凌高樂未回　　　宋祖の凌高 楽しみ 未だらず

三千歌舞宿層臺　　　三千の歌舞 層台に宿す

湘潭雲盡暮山出 雲 尽きて 暮山 出で

巴蜀雪消春水來 雪 消えて 春水 来る

行殿有基荒薺合　　　　 有りて 合し

寢園無主野棠開　　　寝園 主 無くして 開く

百年便作萬年計　　　百年 ち 万年の計をせども

巌畔古碑空綠苔　　　の古碑 空しく

**洛陽城**

禾黍離離半野蒿　　　 として は

昔人城此豈知勞　　　 にきて に労を知らんや

水聲東去市朝變　　　水声 東に去りて 市朝 変じ

山勢北來宮殿高　　　山勢 北より来たりて 宮殿 高し

鴉噪暮雲歸古堞　　　鴉は 暮雲にぎて に帰り

鴈迷寒雨下空壕　　　鴈は 寒雨に迷いて 空壕に下る

可憐緱嶺登仙子　　　憐われむ可し の

猶自吹笙醉碧桃　　　おら笙を吹きて に酔う

**金陵　　　　金陵**

玉樹歌殘王氣終　　　 歌 残りて 王気 終わり

景陽兵合戍樓空　　　 兵 して し

楸梧遠近千官塚　　　 遠近 千官の塚

禾黍高低六代宮　　　 高低 の宮

石燕拂雲晴亦雨　　　 雲を払いて 晴れてた雨ふり

江豚吹浪夜還風　　　 浪を吹いて 夜た風

英雄一去豪華盡　　　英雄 一たび去りて 豪華尽き

惟有青山似洛中　　　だ の 洛中に似たる 有るのみ

**咸陽城東樓　　　　　　咸陽城の東楼**

一上高城萬里愁　　　一たび 高城に上れば 万里 愁う

蒹葭楊柳似汀洲　　　 に似たり

溪雲初起日沈閣　　　 初めて起りて 日 閣に沈み

山雨欲來風滿樓　　　山雨 来らんと欲して 風 楼に満つ

鳥下綠蕪秦苑夕　　　鳥は綠蕪に下る の

蟬鳴黃葉漢宮秋　　　蟬は黃葉に鳴く 漢宮の秋

行人莫問當年事　　　 問うかれ 当年の事

故國東來渭水流　　　故国 流る

**晚自東郭回留一二遊侶　　にり一二の遊侶を留む**

鄉心迢遰宦情微　　　 として なり

吏散尋幽竟落暉　　　 散じ を尋ねて をう

林下草腥巢鷺宿　　　林下 草 くして り

洞前雲濕雨龍歸　　　洞前 雲 いて 帰る

鐘隨野艇回孤棹　　　鐘はに従いて　をし

鼓絕山城掩半扉　　　は山城に絶えて をう

今夜西齋好風月　　　今夜 に 風月 好からん

一瓢春酒莫相違　　　の いうこと かれ

**題飛泉觀宿龍池　　　　のに題す**

西巖泉落水容寬　　　 泉 落ちて 水容 く

靈物蜿蜒黑處蟠　　　 として にる

松葉正秋琴韻響　　　 に秋にして 響き

菱花初曉鏡光寒　　　 初めてけて 寒し

雲収星月浮山殿　　　雲は星月を収め 山殿に浮かび

雨過風雷遶石壇　　　雨は風雷を過ぎて 石壇をる

仙客不歸龍亦去　　　 帰らず 龍 た 去り

稻畦長滿此池乾　　　 長く満ちて 此の池 乾く

**咸陽懷古**

經過此地無窮事　　　此の地を経過して の事あり

一望淒然感廢興　　　一望 として を感ず

渭水故都秦二世　　　の故都 秦の二世

咸陽秋草漢諸陵　　　の秋草 漢の諸陵

天空絕塞聞邊鴈　　　天は空しくして　絶塞に を聞き

葉盡孤村見夜燈　　　葉は尽きて 孤村に夜灯を見る

風景蒼蒼多少恨　　　風景は蒼々たり 多少の恨

寒山半出白雲層　　　寒山　半ば出ず 白雲の層

**黃陵廟**

小孤洲北浦雲邊　　　 の

二女明粧共儼然　　　二女の明粧 共にたり

野廟向江春寂寂　　　 江に向かいて 春

古碑無字草芊芊　　　古碑 字 無くして 草 たり

東風近暮吹芳芷　　　東風 暮に近かく を吹き

落日山深哭杜鵑　　　落日 山に深く く

猶似含嚬望巡狩　　　猶お を含みて を望むに似たり

九疑如黛隔湘川　　　はの如く を隔つ

**晚歇湘源縣　　　　　晚ににむ**

烟郭遥聞向晚雞　　　 遥かに聞く に向う

水平舟靜浪聲齊　　　水 平にして 舟 静かにして 斉し

高林帯雨楊梅熟　　　高林 雨を帯びて 熟し

曲岸籠雲謝豹啼　　　曲岸 雲をめて 啼く

二女廟荒宮樹老　　　二女の廟は荒れて 宮樹老い

九疑山碧楚天低　　　九疑山は碧にして 楚天低し

湘南自古多離怨　　　湘南 り 多し

莫動哀吟易慘悽　　　を動して を 易からしむること莫かれ

**廢宅**

風飄碧瓦雨摧垣　　　風はをし 雨は垣をく

却有隣人爲鎖門　　　却って 隣人の為に 門を鎖ざす有り

幾樹好花閑白晝　　　幾樹の好花 白昼にに

滿庭荒草易黃昏　　　満庭の荒草 なりし

放魚池涸蛙爭聚　　　放魚の池はて 蛙は争いてり

棲燕梁空雀自喧　　　の梁は空しく 雀はらすし

不獨淒涼眼前事　　　り たる 眼前の事のみならず

咸陽一火便成原　　　咸陽 一火 便ち と成る

**龍泉寺絕頂　　　　の**

未明先見海底日　　　未だ明けざるに ず 海底の日を見る

良久遠雞方報晨　　　久くして 遠雞 にを報ず

古樹含風長帶雨　　　古樹 風を含みて 長く雨を帯び

寒巖四月始知春　　　 四月 始めて春を知る

中天氣爽星河近　　　中天 気 にして 星河 近く

下界時豐雷雨勻　　　下界 時 豊にして 雷雨 し

前後登臨思無盡　　　前後 登臨して 思いは尽くること無し

年年改換往來人　　　年々 改めわる 往来の人

**和賈至早朝大明宮****の「ににす」に和す**

絳幘雞人送曉籌　　　の を送り

尚衣方進翠雲裘　　　 に進む

九天閶闔開宮殿　　　九天の 宮殿を開き

萬國衣冠拜冕旒　　　万国の衣冠 を拝す

日色乍臨仙掌動　　　日色 乍ち にみて動き

香烟欲傍袞龍浮　　　香煙はに傍いて浮ばんと欲す

朝罷須裁五色詔　　　朝 みて らく 五色のを裁すべし

佩聲歸向鳳池頭　　　 帰り向う の

**和賈至早朝大明宮　　のににすに和す**

雞鳴紫陌曙光寒　　　雞はに鳴いて 寒し

鶯囀皇州春色闌　　　鶯は皇州に転じて 春色 なり

金闕曉鐘開萬戸　　　の曉鐘 万戸を開き

玉階仙仗擁千官　　　の仙仗 千官を擁す

花迎劒珮星初落　　　花はを迎え 星初めて落ち

柳拂旌旗露未乾　　　柳はを払いて 露 未だ乾かず

獨有鳳皇池上客　　　独り の のみ有り

陽春一曲和皆難 陽春の一曲 和すること 皆 し

**詶暢當嵩山尋麻道士見寄　　暢当がも麻道士を尋ねが寄せらるるに詶ゆ**

聞逐樵夫閑看棋　　　聞く をいてにを看ると

忽逢人世是秦時　　　忽ち 人世に逢うは 是れ 秦時

開雲種玉嫌山淺　　　雲を開き 玉を種えて 山の浅きを嫌い

渡海傳書怪鶴遲　　　海を渡り 書を伝えて 鶴の遅きを怪しむ

陰洞石幢微有字　　　の かに字有り

古壇松樹半無枝　　　の ば枝無し

煩君遠示青囊籙　　　君をして 遠く示す

願得相從一問師　　　願はくは 相従うを得て 一たび師に問わん

**呉中別嚴士元　　　 に別る**

春風倚棹闔閭城　　　春風 棹に倚る の城

水國春寒陰復晴　　　水国 春寒くして りて復た晴る

細雨濕衣看不見　　　細雨 衣をして 看れども見えず

閑花落地聽無聲　　　 地に落ちて 聽くに声なし

日斜江上孤帆影　　　日は斜めなりて 江上 孤帆の影

草綠湖南萬里情　　　草は緑なり 湖南 万里の情

東道若逢相識問　　　東道 若し の問うに逢わば

青袍今已誤儒生　　　 今 已に を誤まると

**送王二少府貶潭・峡　　の・にせらるるを送る**

嗟君此別意何如　　　く 君が此の別れ 意何如んと

駐馬銜**盃**問謫居　　　馬をめ　杯をんで を問う

巫峽啼猿數行淚　　　 猿 啼き の淚

衡陽歸雁幾封書　　　の帰雁 幾封の書

青楓江上秋天遠　　　 秋天 遠く

白帝城邊古木疎　　　 古木 らなり

聖代祗今多雨露　　　聖代 多雨の露

暫時分手莫躊躇　　　を手を分つも することかれ

**西塞山**

西晉樓船下益州　　　の楼船 益州より下り

金陵王氣漠然收　　　金陵の王気 漠然として收まる

千尋鐵鎖沈江底　　　の 江底に沈み

一片降旛出石頭　　　一片の より出ず

人世幾回傷往事　　　人世 幾回か 往事を傷む

山形依舊枕寒流　　　山形 旧に依りて 寒流に枕す

今逢四海爲家日　　　今　四海　家と為るの日に逢いて

故壘蕭蕭蘆荻秋　　　故塁 蕭々として 秋なり

**早春五門西望　　　早春 五門より西望す**

百官朝下五門西　　　百官 朝を下る 五門の西

塵起春風滿御堤　　　塵は春風に起りて 御堤に満つ

黃帕蓋鞍呈了馬　　　　鞍をう し了る馬

紅羅纏項鬬回雞　　　　にう いてる雞

館松枝重牆頭出　　　館松 枝 重くして より出で

渠柳條長水面齊　　　 長くして 水面にし

惟有教坊南草色　　　だ 教坊の南草の 色のみ有りて

古城陰處冷淒淒　　　古城の 冷やかにして たり

**錦瑟**

錦瑟無端五十絃　　　 くも 五十絃

一絃一柱思華年　　　 を思う

莊生曉夢迷蝴蝶　　　荘生の　に迷い

望帝春心託杜鵑　　　望帝の春心 に託す

滄海月明珠有淚　　　 月 明かにして に淚有り

藍田日暖玉生煙　　　 日 にして は煙を生ず

此情可待成追憶　　　此の情 追憶を成すを待つべけんや

只是當時已惘然　　　只だ是れ 当時 已に

**江亭春霽**

江蘺漠漠荇田田

江上雲亭霽景鮮　　　江上の雲亭 鮮なり

蜀客帆檣背歸燕　　　の 燕の帰るにき

楚山花木怨啼鵑　　　楚山の花木 の啼くを怨む

春風掩映千門柳　　　春風　す 千門の柳

曉色淒涼萬井烟　　　 たり の煙

金磬泠泠水南寺　　　 泠々たり の寺

上方臺殿翠微連　　　上方の台殿 連なる

**送人之嶺南　　　人のにくを送る**

關山迢遰古交州　　　関山 たり

歳晏憐君走馬遊　　　れて憐む 君が 馬を走せて遊ぶを

謝氏海邊逢奼女　　　 に逢い

越王潭上見青牛　　　 青牛を見る

嵩臺月照啼猿樹　　　 月は照らす の樹

石室烟涵古桂秋　　　石室 煙はす の秋

迴望長安五千里　　　長安をすれば 五千里

刺桐花下莫淹留　　　の花下 すること莫かれ

**九日登仙臺呈劉明府　　九日 仙台に登りに呈す**

漢文皇帝有高臺　　　の高台 有り

此日登臨曙色開　　　此の日 すれば 開く

三晉雲山皆北向　　　の雲山 皆 北に向い

二陵風雨自東來　　　二陵の風雨 東り来る

關門令尹誰能識　　　関門の 誰か能く識る

河上仙翁去不回　　　河上の 去りてらず

且欲近尋彭澤宰　　　つ 近く のを尋ね

陶然一醉菊花杯　　　として 一たび 菊花の杯に酔わんと欲す

**叢臺**

有客新從趙地回　　　客有り 新たに の地りる

自言曾上古叢臺　　　ら言う て に上ると

雲遮襄國天邊去　　　雲はをりて 天辺に去り

樹繞漳河地裏來　　　樹はをりて より来たる

絃管變成山鳥哢　　　 変じて 山鳥と成ってり

綺羅留作野花開　　　綺羅 留まりて 野花と作りて開く

金輿玉輦無消息　　　 消息無く

風雨惟知長綠苔　　　風雨 だ知る 緑苔を長ぜしむるを

**寒食**

獨把一杯山館中　　　独り 一杯をる 山館の

每驚時節恨飄蓬　　　時節に驚くに を恨む

侵堦草色連朝雨　　　を侵す草色 連朝の雨

滿地梨花昨夜風　　　地に満つる梨花 昨夜の風

蜀魄啼來春寂寞　　　蜀魄 啼き来たりて 春 寂寞

楚魂吟後月朦朧　　　楚魂 吟ずる後 月 朦朧

分明記得還家夢　　　分明にす 家に還る夢

徐孺宅前湖水東　　　が 湖水の東

**隋宮**

紫泉宮殿鎖煙霞　　　の宮殿 にされ

欲取蕪城作帝家　　　を取りて 帝家と作さんと欲す

玉璽不緣歸日角　　　 に帰すにらずんば

錦帆應是到天涯　　　 に是れ 天涯に到るべし

于今腐草無螢火　　　 腐草に 無く

終古垂楊有暮鴉　　　 に 有り

地下若逢陳後主　　　地下にて し 陳の後主に逢わば

豈宜重問後庭花　　　に く 重ねて を問うべけんや

**馬嵬**

海外徒聞更九州　　　海外 らに聞く 更に九州ありと

他生未卜此生休　　　は未だせず 此の生は休す

空聞虎旅鳴宵柝　　　空しく の を鳴らすを聞き

無復雞人報曉籌　　　た の を報ずる無し

此日六軍同駐馬　　　此の日 同じく馬を駐め

當時七夕笑牽牛　　　当時 を笑う

如何四紀爲天子　　　んぞ の天子と為りて

不及盧家有莫愁　　　の 有るに 及ばざるは

**籌筆驛**

魚鳥猶疑畏簡書　　　魚鳥猶お疑う 簡書をるるかと

風雲**長**爲護儲胥　　　風雲 に為に を護る

徒令上將揮神筆　　　に 上将をして 神筆をわしめ

終見降王走傳車　　　に見る　の伝車を走らすを

管樂有才終不忝　　　管楽 才有りて にからず

關張無命欲何如　　　関張 無くして 何如せんと欲す

他年錦里經祠廟　　　他年 に をば

梁父吟成恨有餘　　　 成りて 恨み 余り有らん

**聞歌　　　　　　歌を聞く**

斂笑凝眸意欲歌　　　笑をめ を凝らして 意 歌わんと欲す

高雲不動碧嵯峨　　　高雲 動かず たり

銅臺罷望歸何處 銅台を望むをめ 何れの処にか帰る

玉輦忘還事幾多　　　　るを忘るる事 ぞ

青冢路邊南雁盡　　　 尽き

細腰宮裏北人過　　　 北人 過ぐ

此聲腸斷非今日　　　此の声 腸断するは 今日にらず

香灺燈光奈爾何　　　香灺の灯光 を せん

**茂陵　　　茂陵**

漢家天馬出蒲梢　　　漢家の天馬 を出ず

苜蓿榴花遍近郊　　　の 近郊にし

内苑只知銜鳳觜　　　内苑 只だ知る をむを

屬車無復插雞翹　　　 た をむ無し

玉桃偷得憐方朔　　　 み得て をみ

金屋妝成貯阿嬌　　　 い成りて をう

誰料蘇卿老歸國　　　誰からん 老いて国に帰れば

茂陵松栢雨蕭蕭　　　の 雨 たらんとは

**早秋京口旅泊　　　 に旅泊す**

移家避寇逐行舟　　　家を移して を避け をう

厭見南徐江水流　　　見るをう 江水の流るるを

吳地征徭非舊日　　　の 旧日に非らず

秣陵凋弊不宜秋　　　の 秋に宜しからず

千家閉戶無砧杵　　　千家 戶を閉ざして 無く

七夕何人望斗牛　　　 何人か を望む

惟有同時驄馬客　　　惟だ 同時に の客の

偏題尺牘問窮愁　　　偏えに を題して を問う有るのみ

**晚次鄂州　　　　ににる**

雲開遠見漢陽城　　　雲開けて 遠く見る 漢陽城

猶是孤帆一日程　　　猶お 是れ 一日の

估客晝眠知浪靜　　　 昼に眠り 浪の静かなるを知り

舟人夜語覺潮生　　　舟人 夜に語りて の生ずるを覚ゆ

三湘愁鬢逢秋色　　　の 秋色に逢い

萬里歸心對月明　　　万里の帰心 に対す

舊業已隨征戰盡　　　 已に 征戦に従いて尽く

更堪江上鼓鼙聲　　　更に 堪えんや 江上 の声に

**赴武陵寒食次松滋渡　にき寒食ににる**

杏花楡莢曉風前　　　 の前

雲際離離上峽船　　　にたり　を上る船

江轉數程淹驛騎　　　江は転じて 数程　駅騎をむれば

楚曾三戸少人煙　　　楚は曽て 三戸にして 人煙 なり

看春又過清明節　　　春を看て 又 清明節を過ぎ

算老重經癸巳年　　　老を算えて 重ねて 　の年

幸得柱山當郡舍　　　幸に のに当たるを得たり

在朝長詠卜居篇　　　朝に在りて 長く詠ず

**鄂州寓嚴澗宅　　　にて厳澗の宅に寓す**

鳳有高梧鶴有松　　　に高梧有り 鶴に松有り

偶來江外寄行踪　　　たま 江外に来たりてをす

花枝滿院空啼鳥　　　は院に満ちて 空しく啼く鳥

塵榻無人憶臥龍　　　は人無くして を憶う

心想夜閑唯足夢　　　心に想う 夜 閑かにして　唯だ 夢みるに ると

眼看春盡不相逢　　　眼は 春の尽くるを看て わず

何時最是思君處　　　何れの時か 最も是れ 君を思う処

月入斜窗曉寺鐘　　　月は斜窓に入る の鐘

**九日齊安登高　　　九日 に登高す**

江涵秋影鴈初飛　　　江は秋影をして 初めて飛ぶ

與客攜壺上翠微　　　と壺を携えて に上る

塵世難逢開口笑　　　 逢い難し 口を開いて笑うに

菊花須插滿頭歸　　　菊花 らく にして帰るべし

但將酩酊酬佳節　　　但だ　に　して　にい

不用登臨怨落暉　　　用いず して を怨むを

古往今來只如此　　　 只だくの如し

牛山何必獨霑衣　　　牛山 何ぞ 必ずしも 独り 衣をさん

**贈王尊師　　　に贈る**

先生自說瀛洲路　　　先生 ら説く の

多在青松白石間　　　多くは の間に在りと

海岸夜中常見日　　　海岸 夜中 常に日を見

仙宮深處却無山　　　仙宮 深き処 却って 山無し

犬隨鶴去遊諸洞　　　犬は 鶴に随いて去りて 諸洞に遊び

龍作人來問大還　　　龍は 人とり来りて を問う

今日偶聞塵外事　　　今日 たま聞く 塵外の事

朝簪未擲復何顏　　　 未だ たず た 何んのせぞ

**贈王山人　　　　に贈る**

貰酒攜琴訪我頻　　　酒をり 琴を携えて 我を訪れること りなり

始知城市有閑人　　　始めて知る 城市に 有るを

君臣藥在寧憂病　　　君臣　薬在りぞに病をえん

子母錢成豈患貧　　　子母　銭成りて に貧をえん

年長每勞推甲子　　　年 長じて に を推すを労し

夜寒初共守庚申　　　夜 寒くして 初めて 共に を守る

近來聞說燒丹處　　　近来 く を焼く処

玉洞桃花萬樹春　　　玉洞の桃花 万樹の春なりと

湘口送友人　　　に友人を送る

中流欲暮見湘煙　　　中流 暮んと欲して を見る

**岸葦**無窮接楚田　　　 窮まり無くして に接す

去雁遠衝雲夢雪　　　 遠くく の雪

離人獨上洞庭船　　　 独り登る 洞庭の船

風波盡日依山轉　　　風波 尽日 山に依りて転じ

星漢通霄向水連　　　 水に向って連なる

零落梅花過殘臘　　　せる梅花 を過ぎ

故園歸去醉新年　　　故園に帰り去りて 新年に酔わん

**元達人上人種藥　　　を種ゆ**

雨滌煙鋤偃破籬　　　雨にぎ 煙にき にす

紺牙紅甲兩三畦

藥名却笑桐君少　　　薬名 却って 笑う の少きを

年紀翻嫌竹祖低　　　年紀 って う の低きを

白石淨敲蒸朮火　　　白石 くく をす火

清泉閑洗種花泥　　　清泉 に洗う 花を種うる泥

怪來昨日休持鉢　　　怪しみ来たる 昨日鉢を持つを休むるを

一尺雕胡似掌齊　　　一尺の のしきに似たり

**黃鶴樓**

昔人已乘黃鶴去　　　 已に に乗じて去り

此地空餘黃鶴樓　　　此の地 空しく余す

黃鶴一去不復返　　　 一たび去りて た返らず

白雲千載空悠悠　　　白雲 千載 空しく悠々

晴川歷歷漢陽樹　　　晴川 たり の樹

芳草萋萋鸚鵡洲　　　芳草 たりの洲

日暮鄉關何處是　　　 何れの処か是れなる

煙波江上使人愁　　　煙波 江上 人をして 愁えしむ

**自蘇臺至望亭驛人家盡空　りに至りる。人家く空し**

南浦菰**蒲**覆白蘋　　　の を覆う

東呉黎庶逐黃巾　　　の にわる

野棠自發空流水　　　 ら発き 空しく水に流れ

江燕初歸不見人　　　 初めて帰りて 人を見ず

遠樹依依如送客　　　遠樹 としてを送るが如く

平田渺渺獨傷春　　　 として 独り春を傷む

那堪回首長洲苑　　　んぞ堪えんや を長洲の苑にすに

烽火年年報虜塵　　　 を報ず

**與僧話舊　　　　　僧と旧をる**

巾舃同時下翠微　　　 同時に に下る

舊遊因話事多違　　　旧遊 話るにりて 事多くう

南朝古寺幾僧在　　　南朝の古寺 幾僧か在る

西嶺空林唯鳥歸　　　西嶺の空林 唯だ鳥のみ帰る

莎徑晚煙凝竹塢 の晚煙 に凝り

石池春水染苔衣　　　の春水 を染む

此時相見又相別　　　此の時 相見て 又相別る

即是關河朔鴈飛　　　即ち是れ 飛ぶ

**長洲懷古**

野燒原空盡荻灰　　　 く

呉王此地有樓臺　　　呉王 此の地に 楼台有り

千年事往人何在　　　千年の事きて　人何くにか在る

半夜月明潮自來　　　半夜 月明かにして 自ら来たる

白鳥影從江樹沒　　　白鳥 影は 江樹に従いて沒し

清猿聲入楚雲哀　　　　声は楚雲に入りて哀しむ

停車日晚薦蘋藻　　　車をめ 日は晚れて 蘋藻をむれば

風靜寒塘花正開　　　風は静かにして 花 に開

**煬帝行宮　　　　の**

此地曾經翠輦過　　　此の地 曽て たり の過ぐるを

浮雲流水竟如何　　　浮雲 流水 に

香銷南國美人盡　　　香は南国にして 美人 尽き

怨入東風芳草多　　　怨みは東風に入りて 芳草 多し

殘柳宮前空露葉　　　 宮前に 空しく

夕陽川上浩煙波　　　 に し

行人遙起廣陵思　　　 遙かに起こす の思

古渡月明聞棹歌　　　 月 明かにしてを聞く

**經故丁補闕郊居 　　　がを**

死**酬**知己道終全　　　死して知己に酬い 道 に全し

波暖孤冰且自堅　　　波 暖にして おらし

鵩上承塵纔一日　　　鵩はに上りて かに一日

鶴歸華表已千年　　　鶴はに帰りて 已に千年

風吹藥蔓迷樵徑　　　風はを吹いて を迷わせ

水暗蘆花失釣船　　　水はに暗くして を失う

四尺孤墳何處是　　　の孤墳 何れの処か是れなる

闔閭城外草連天　　　 草 天に連なる

**贈蕭兵曹　　　に贈る**

廣陵堤上昔離居　　　 昔 す

帆轉瀟湘萬里餘　　　帆はに転ず

楚澤病時無鵩鳥　　　 病む時 無く

越郷歸去有鱸魚　　　越郷 帰り去りて 鱸魚有り

潮生水國蒹葭響　　　潮は水国に生じて 響き

雨過山城橘柚疎　　　雨は山城を過ぎて　 なり

聞說攜琴兼載酒　　　く 琴を携え 兼ねて酒を載すと

邑人爭識馬相如　　　 か を らんや

**酬張芬赦後見寄　　　がに寄せらるるにゆ**

紫鳳朝銜五色書　　　 朝よりむ 五色の書

陽春忽布網羅除　　　陽春 ちいて 除かる

已將心變寒灰後　　　已に 心はの後に 変ずるをって

豈料光生腐草餘　　　に 料らんや は の余に生ぜんとは

建水風煙收客淚　　　の風煙 を收め

杜陵花竹夢郊居　　　の花竹 を夢めむ

勞君故有詩**人**贈　　　君を労して に 詩人の贈あり

欲報瓊瑤**愧**不如　　　をいんと欲して 如しからざるをず

**答竇拾遺臥病見寄　　が病に臥して寄せらるに答ゆ**

今春扶病移滄海　　　今春 をけ に移り

幾度承恩對白花　　　か 恩をけ 白花に対す

送客屢聞簷外鵲　　　客を送りて しば聞く の

銷愁已辨酒中虵　　　愁をして 已に弁ず 酒中の

瓶収枸杞懸泉水　　　瓶には の水を収め

鼎鍊芙蓉伏火砂　　　には の 砂をる

誤入塵埃牽吏役　　　誤って に入り にかる

羞將簿領到君家　　　恥ずらくは をって 君が家に到しを

**寄樂天　　　 楽天に寄す**

榮辱升沈影與身　　　 影と身と

世情誰是舊雷陳　　　 だ 是れ

唯應鮑叔猶憐我　　　だ に 猶お 我を憐むべし

自保曾參不殺人　　　ら保す 曾參が人を殺さざるに

山入白樓沙苑暮　　　山は白楼に入る の暮

潮生滄海野塘春　　　はに生ず の春

老逢佳景唯惆悵　　　老いて に逢いて 唯だ す

兩地各傷無限神　　　 おの 傷ましむ 無限の

**秋居病中　　　　秋居の病中**

幽居悄悄何人到　　　 として か到らん

落日清涼滿樹梢　　　落日 清涼として に満つ

新句有時愁裏得　　　新句 時に有りて に得

古方無效病來拋　　　 效無くして つ

荒簷數蝶懸蛛網　　　の に懸かり

空屋孤螢入燕巢　　　の に入る

獨臥南窗秋色晚　　　独り 南窓に臥す 秋色の

一庭紅葉掩衡茅　　　一庭の紅葉 をう

**送崔約下第歸揚州　　がしてに帰るを送る**

滿座詩人吟送酒　　　満座の詩人 吟じて酒を送る

離城此會亦應稀　　　城を離るる此の会 たになるべし

春風下第時稱屈　　　春風に下第して時につと称し

秋卷呈親自束歸　　　 親にせんとして　らねて帰る

日晚山花當馬落　　　日は晚れて 山花 馬に当って落ち

天陰水鳥傍船飛　　　天は陰りて 水鳥 船に傍いて飛ぶ

江邊道路多苔蘚　　　江辺 道路 苔蘚 多し

塵土無由得上衣　　　塵土 由し無し 衣に上るを得るに

**旅館書懷　　　　旅館にてを書す**

忽看庭樹換風煙　　　忽ち看る　庭樹の 風煙を換うるを

兄弟飄零寄海邊　　　兄弟 して　海辺に寄す

客計倦行分陝路　　　客計 行に倦む 分陝の路

家貧休種汶陽田　　　家貧しくして 種うるをむ の田

雲低遠塞鳴寒鴈　　　雲はにれて 鳴き

雨歇空山噪暮蟬　　　雨は空山にんで ぐ

落葉蟲絲滿窗戶　　　落葉 窓戶に満つ

秋堂獨坐思悠然　　　秋堂に独坐して いは悠然たり

**頴州客舍　　　　の**

素琴孤劒尚閑遊　　　 お す

誰共芳尊話唱酬　　　誰と共にか を話って せん

郷夢有時生枕上　　　 時有りて に生じ

客情終日在眉頭　　　 日終るとき に在り

雲拖雨脚連天去　　　雲は の 天にりて去るるをき

樹夾河聲繞郡流　　　樹は の 郡をりて流るるをむ

回首帝京歸未得　　　首をらせども 帝京に帰るを未だ得ず

不堪吟倚夕陽樓　　　堪えず 吟じつつ 夕陽の楼にるに

**春日長安即事　　　 長安即事**

一百五日又欲來　　　一百五日 又 来たらんと欲す

梨花梅花參差開　　　梨花 梅花 として開く

行人自笑不歸去　　　行人 ら笑う 帰り去らざるを

瘦馬獨吟真可哀　　　に 独り吟じて 真に哀れむべし

杏酪漸香鄰舍粥　　　 くし の

榆煙將變舊爐灰　　　 に変ぜんとす 旧炉の灰

玉樓春煖笙歌夜　　　玉楼 春暖かなり の夜

肯信愁腸日九迴　　　えて信ぜんや の 日にするを

**江際**

杳杳漁舟破暝煙　　　たる漁舟 を破る

疎疎蘆葦舊江天　　　たる の天

那堪流落逢搖落　　　んぞ堪えん して に逢うに

可得潸然是偶然　　　得べけんや 是れ 偶然なるを

萬頃白波迷宿鷺　　　の を迷わせ

一林黃葉送秋蟬　　　一林の黃葉 を送る

兵車未息年華促　　　兵車 未だまず る

早晚閑吟向滻川　　　早晚 して に向わん

**中年　　　　中年**

漠漠秦雲淡淡天　　　たる たる天

新年景象入中年　　　新年の景象 中年に入る

情多最恨花無語　　　 多くして 最も恨む 花に語無きを

愁破方知酒有權　　　愁い 破れて に知る 酒に権有るを

苔色滿牆思故第　　　 に満ちて を思い

雨聲入夜憶春田　　　雨声 夜に入って をう

衰遲自喜添詩學　　　 ら喜ぶ 詩学を添うるを

更把前題改數聯　　　更に 前題を把りて 数聯を改む

**秋日東郊作　　　　の作**

閑看秋水心無事　　　かに を看て 心 無事なり

臥對寒松手自栽　　　して に対して 手 ら栽ゆ

廬岳高僧留偈別　　　の高僧 偈を留めて別れ

茅山道士寄書來　　　の道士 書を寄せて来たる

燕知社日辭巢去　　　燕は社日を知りて 巣を辞して去り

菊爲重陽冒雨開　　　菊は重陽の為に 雨をして開く

淺薄將何稱獻納　　　 何をって と称せん

臨岐終日自徘徊　　　岐に臨みて 終日 自ら徘徊す

**過乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若　　　・がのにぎらる**

無着天親弟與兄　　　 とと

嵩丘蘭若一峰晴　　　の一 峰 晴る

食隨鳴磬巢烏下　　　食はに随いて 下り

行踏空林落葉聲　　　は空林を踏みて 落葉 声あり

迸水定侵香案濕　　　は定めて を侵して 湿い

雨花應共石牀平　　　は に と共に 平かなるべし

深洞長松何所有　　　の 何の有る所ぞ

儼然天竺古先生　　　たり の

**送友人遊江南　　　　友人の江南に遊ぶを送る**

遠別悠悠白髮新　　　遠別 として 白髮新たなり
江潭何處是通津　　　 何れの処か 是れ

潮聲偏懼初來客　　　 えにれしむ の

海味唯甘久住人　　　 唯だ甘し の人

漠漠煙光前浦晚　　　たる の

青青草色定山春　　　青々たる草色 定山の春

汀洲更有南迴雁　　　 更にの雁有り

亂起聯翩北向秦　　　乱れち として北のかた秦に向う

**送別友人　　　友人に送別す**

獨向山中覓紫芝　　　独り 山中にいて をむ

山人勾引住多時　　　山人 勾引して すること 多時なり

摘花浸酒春愁盡　　　花を摘み 酒に浸せば 尽き

燒竹煎茶夜臥遲　　　竹を燒き 茶をじて 夜 すること遅し

泉落林梢多碎滴　　　泉はに落ちて 多く

松生石底足旁枝　　　松は石底に生じて 足る

問明朝却欲歸城　　　明朝 却って 城市に帰らんと欲す

市我來期總不知 我にを問えども 総て知らず

**嶺南道中　　　　　　の道中**

嶺水爭分路轉迷　　　 争い分かれて 路 た迷う

桄榔椰葉暗蠻溪　　　 に暗し

愁衝毒霧逢**蛇**草　　　毒霧を衝いて愁いて に逢い

畏落沙蟲避燕泥　　　の落ちることをれて を避く

五月畬田收火米　　　五月の 火米を收む

三更津吏報潮雞　　　三更の を報ず

不堪腸斷思郷處　　　　に堪えず 郷を思う処

紅槿花中越鳥啼　　　 く

**病起　　　　よりつ**

春初一臥到秋深　　　 一たびして 秋の深きに到る

不見紅芳與綠陰　　　見ず とと

窗下展書難久讀　　　に書をべて　久しくは読むこと難く

池邊扶杖欲閑吟　　　池辺に杖にけられて 閑かに吟ぜんと欲す

藕穿平地生荷葉　　　は平地をちて を生じ

笋過東家作竹林　　　は東家を過ぎて と作る

在舍渾如遠郷客　　　に在りて べて のの如く

詩僧酒伴鎮相尋　　　詩僧　酒を伴いて いに相尋ぬ

**送李錄事赴饒州　　　がにくを送る**

北人南去雪紛紛　　　北人 南に去りて 雪 紛紛

雁**過**汀洲不可聞　　　雁はを過ぎて 聞くべかず

積水長天隨**逐**客　　　 にい

荒城極浦足寒雲　　　荒城 寒雲足る

山從建業千峰出　　　山はに従いて 千峰 出で

江至潯陽九派分　　　江はに至りて 九派 分かる

借問督郵纔弱冠　　　す に弱冠

府中年少不如君　　　府中の年少 君にかじ

**清明日與友人遊玉塘莊　清明の日 友人とに遊ぶ**

幾宿春山共陸郎　　　幾たびか 春山に宿り 陸郎と共にす

清明時節好風光　　　清明の時節 好風光

細穿綠荇船頭滑　　　をして 滑かに

**砕**踏殘花屐齒香　　　をして し

風急嶺雲飄迥野　　　風 急にして にり

雨餘山水落方塘　　　の 山水 に落つ

不堪吟罷東回首　　　堪えず 吟じ罷みて 東にをらすに

滿耳蛙聲正夕陽　　　耳に満つる に

**宿淮浦寄司空曙　　　にりてに寄す**

愁心一倍長離憂　　　 一倍 を長ず

夜思千重戀舊遊　　　 旧遊を恋う

秦地故人成遠夢　　　の故人 遠夢と成り

楚天**多**雨在孤舟　　　の多雨に 孤舟に在り

諸溪近海潮皆應　　　諸溪 **海**に近くして 皆 応じ

獨樹邊淮葉盡流　　　独樹 に辺いて 葉 く流る

別恨轉深何處寫　　　別恨 た 深く何れの処にか写さん

前程唯有一登樓　　　前程 唯だ有り 一登楼

**尋郭道士不遇　　　を尋ねてわず**

郡中乞假來**尋**訪　　　に仮を乞いて 来たりてせしに

洞裏朝元去不逢　　　 元に朝して 去りて逢わず

看院祗留雙白鶴　　　院を看みれば だ留む

入門惟見一青松　　　門に入れば だ見る

藥爐有火丹應伏　　　薬炉 火有りて に伏すべし

雲碓無人水自舂　　　 人無く 水 ら舂なり

欲問參同契中事　　　問わんと欲す の事

未知何日得相從　　　未だ知らず 何れの日にか　相い從うを得ん

**早秋寄題天竺靈隱寺 　　早秋 ・に寄題す**

峰前峰後寺新秋　　　 寺 新たに秋なり

絕頂高窗見沃洲　　　絕頂のに を見る

人在定中聞蟋蟀　　　人はに在りて を聞き

鶴曾棲處挂獼猴　　　鶴の曽て棲みし処 をく

山鐘夜渡空江水　　　 夜 渡る 空江の水

汀月寒生古石樓　　　 寒く生ず 古石楼

心憶懸帆身未遂　　　心にを憶えども 身 未だげず

謝公此地昔**曾**遊　　　 此の地に 昔 て 遊ぶ

**題宣州開元寺水閣　　　ののに題す**

六朝文物草連空　　　の文物 草 空に連なる

天淡雲閑今古同　　　天淡く 雲かに 今古同じ

鳥去鳥來山色裏　　　鳥去り 鳥来たる 山色の

人歌人哭水聲中　　　人歌い 人哭す 水声の

深秋簾幕千家雨　　　深秋 千家の雨

落日樓臺一笛風　　　落日 楼台 一笛の風

惆悵無因見范蠡　　　す を見るにし

參差煙樹五湖東　　　たる 煙樹 五湖の東

**長安秋夕**

雲物淒涼拂曙流　　　 淒涼として を払って流れ

漢家宮闕動高秋　　　漢家の 高秋に動く

殘星幾點雁橫塞　　　 幾点 雁 塞を橫ぎり

長笛一聲人倚樓　　　長笛 一声 人 楼にる

紫豔半開籬菊靜　　　 半ば開いて 静かなり

紅衣落盡渚蓮愁　　　 落尽くして 愁う

鱸魚正美不歸去　　　 に美なれども 帰り去らず

空戴南冠學楚囚　　　空しく を戴きて を学ぶ

**宿山寺　　　　山寺に宿す**

栗葉重重覆翠微　　　 として をい

黃昏溪上語人稀　　　黃昏 語る人 稀なり

月明古寺客初到　　　月は 古寺に明かにして 初めて到り

風度閑門僧未歸　　　風は に度りて 僧 未だ帰らず

山果經霜多自落　　　山果 霜を経て 多くら落ち

水螢穿竹不停飛　　　水螢 竹を穿ちて 飛びてらず

中宵能得幾時睡　　　 く 幾時のを得ん

又被鐘聲催著衣　　　又 鐘声に 著衣をさる

**題永城驛 永城駅に題す**

秋賦春還計盡違　　　秋にして 春にり 計 くう

自知身是拙求知　　　ら知る身は 是れ 知を求むるに拙なり

唯思曠海無休日　　　だ思う 休日無からんや

**却喜**孤舟似去時　　　却って喜ぶ 孤舟 去る時に似たるを

連浦一程兼汴宋　　　に連なる 一程 を兼ね

夾堤千柳雜唐隋　　　堤をむ千柳 唐隋を雜う

從來此恨皆前達　　　從来 此の恨み 皆 前達あり

敢負吾君作楚辭　　　敢えて 吾が君にいて楚辞をらんや

**慈恩偶題 　　　にたます**

往事悠悠**成**浩歎　　　往事 悠々としてを成す

**浮**生擾擾竟何能　　　浮生 としてに何をか能くせん

故山歲晚不歸去　　　故山 歲れて 帰り去らず

高塔晴來獨自登　　　高塔 晴れ来たりて 独りら登る

林下聽經秋苑鹿　　　林下 を聴く の鹿

江邊掃葉夕陽僧　　　江辺 葉をう夕陽の僧

吟餘却起雙峰念　　　 却って起る 双峰の念

曾看菴西瀑布冰　　　て看る 瀑布の氷

**都城蕭員外寄海棠花　　都城の を寄せらる**

珠履行臺擁附蟬　　　 をす

外郎高步似神仙　　　 高步して 神仙に似たり

陳詞今見唐風盛　　　 今に見る 唐風の盛なるを

從事遙瞻魏國賢　　　 遙かにぐ 魏国の賢

擲地好辭凌綵筆　　　の をぎ

浣花春水膩魚箋　　　浣花の春水 魚箋にく

東山芳意須同賞　　　東山の くに賞すべし

子著囊盛幾日傳　　　をけ に盛って 幾日か伝えん

**陳琳墓　　　　の墓**

曾於青史見遺文　　　て に於いて 遺文を見る

今日飄零過古墳　　　今日 して 古墳を過ぐ

詞客有靈應識我　　　 有らば に我を識るべし

霸才無主始憐君　　　 主無くして 始めて君を憐れむ

石麟埋沒藏春草　　　 埋沒して 春草にれ

銅雀荒涼**起**暮雲　　　銅雀 荒涼として 起こる

莫怪臨風倍惆悵　　　怪しむ莫かれ 風に臨みて ますするを

欲將書劒學從軍　　　書剣をって從軍を学ばんと欲す

**鸚鵡洲眺望　　　　　の眺望**

悵望春襟鬱未開　　　悵望すれば として未だ開かず

重臨鸚鵡益堪哀　　　重ねて を臨んで ます哀れむに堪えたり

曹瞞尚不能容物　　　も 尚お 物を容れる能わず

黃祖何曾解愛才　　　 何ぞ て く 才を愛せん

幽島暖聞燕鴈去　　　幽島 暖くして に去るを聞き

曉江晴覺蜀波來　　　 晴れて 蜀波の来たるを覚ゆ

唯人正得風濤便　　　か に の便を得て

一點征帆萬里迴　　　一点の 万里より迴える

**繡嶺宮**

古殿春殘綠野陰　　　古殿 春は残る 緑野の

上皇曾此駐泥金 上皇 曾って 此に をつ

三城帳屬升平夢 三城の帳はす の夢

一曲鈴關悵望心 一曲のは関わる の心

苑路暗迷香輦絕　　　 暗に迷いて 絶え

繚垣秋斷草煙深　　　 秋に断えて 深し

前朝舊物東流在　　　前朝の旧物 東流 在り

猶爲年年下翠岑　　　お 為に 年々 より下る

**春日道中寄孟侍御　　　春日道中に寄す**

春來游子傷歸路　　　 帰路をむ

時有白雲邀獨行　　　時に白雲の 独行をうる有り

水流亂赴石潭響　　　水流は乱れいて 響き

花發不知山樹名　　　花はいて知らず 山樹の名

誰家魚網求鮮食　　　誰が家の魚網か 鮮食を求め

**何**處人煙事火耕　　　何処の人煙か を事とす

昨日已嘗村酒熟　　　昨日已にむ 村酒の熟すを

一杯思與孟嘉傾　　　一杯 と 傾けんことを思う

**早春歸盩厔李端舊居寄耿湋　　　早春　の旧居に帰りて・に寄す**

野日初晴麥壠分　　　野日 初めて晴れ 分かる

竹園**村巷**鹿成羣　　　 鹿 群れを成す

萬家廢井生新草　　　万家の 新草を生じ

一樹繁花對古墳　　　一樹の 古墳に対す

引水忽驚冰滿澗　　　水を引いて 忽ち驚く 氷のに満つるを

向田空見石和雲　　　田に向いて 空しく見る 石の雲に和するを

可憐荒歳青山下　　　憐われむべし 青山の下

惟有松枝好寄君　　　惟だ のみ有りて 君に寄するに好し

**松滋渡望峽中　　　　よりを望む**

渡頭輕雨**洒**寒梅　　　渡頭の軽雨寒梅にぐ

雲際溶溶雪水來　　　雲際 溶々として 雪水 来たる

夢渚草長迷楚望　　　夢渚 草長じて 楚望を迷わせ

夷陵土黑有秦灰　　　夷陵 土黒くして 秦灰有り

巴人淚應猿聲落　　　巴人の淚は 猿声に応じて落ち

蜀客船從鳥道回　　　蜀客の船は 鳥道りる

十二碧峰何處所　　　十二の の所ぞ

永安宮外是荒臺　　　 是れ 荒台

**春日閑坐**

官曹崇重難頻入　　　 にしてりに入ることく

第宅清閑且獨行　　　 清閑にしてく独り行かん

階蟻相逢如偶語　　　 相逢いて するが如く

園蜂速去恐違程　　　園蜂 速く去りて 程にうことを恐る

人於紅藥**偏憐**色　　　人は に於いて えに色を憐れみ

鶯到垂楊不惜聲　　　鶯は に到りて 声を惜しまず

東洛池臺怨拋擲　　　東洛の池台 を怨む

移文非久會應成　　　移文 久しきにらず ず に成るべし

**妟安寺**

寺深松桂無塵事　　　寺に 松桂 深くして 無し

地接荒郊帶夕陽　　　地はに接し を帯ぶ

啼鳥歇時山寂寂　　　 む時 山

野花殘處月蒼蒼　　　 する処 月

碧紗凝艶開金像　　　 をらして 　開き

清梵銷聲閉竹房　　　 んで 閉ず

丘壠漸平連茂草　　　 く平かにして 連なる

九原何處不心傷　　　 何れの処か 心 傷まざらん

**館娃宮**

艶骨已成蘭麝土　　　 已にの土と成り

宮牆依舊壓層崖　　　 旧に依りて を圧す

弩臺雨壞逢金鏃　　　 雨にれて に逢い

香徑泥銷露玉釵　　　 泥にして をす

硯沼只留山鳥浴　　　只だ 山鳥の浴するを留め

屧廊空信野花埋　　　 空しくす 野花の埋むるに

姑蘇麋鹿真閑事　　　の 真に

須爲當時一愴懷　　　く当時の為に一たびをましむべし

**方干隱居　　　　の隱居**

咬咬嘎嘎水禽聲　　　 の声

露洗松陰滿院清　　　露はを洗い 満院清し

溪畔印沙多鶴跡　　　溪畔沙印して多く

檻前題竹有僧名　　　竹に題して僧名有り

問人遠岫千重意　　　人に問う 千重の意

對客閑雲一片情　　　に対して 一片の情

早晚塵埃得休去　　　早晚 塵埃に休して去るを得て

且將書劒事先生　　　く 書剣をって 先生にえん

**詶李端病中見寄　　　が病中に寄せらるにゆ**

野寺昏鐘山正陰　　　の 山 にく

亂藤高竹水聲深　　　 水声深し

田夫就餉還依草　　　 に就いて お 草に依り

野雉驚飛不過林　　　 して 林をぎる

斎沫暫思同靜室　　　 く思う を同じくせんことを

清羸已覺助禪心　　　　已に覚ゆ 禅心を助くるを

寂寞日長誰問疾　　　 日長くして 誰か疾を問わん

料君惟取古方尋　　　料る 君がだを取りて 尋ねんことを

**贈道士　　　　　　　道士に贈る**

簪星曳月下蓬壺　　　星をし 月をいて に下る

曾見東臯種白楡　　　曽て見る をうるを

六甲威靈藏瑞檢　　　六甲の にめ

五龍雷電遶霜都　　　五龍の雷電 をる

惟教鶴探丹丘信　　　だ 鶴をして らしむ の信を

不使人窺太乙爐 人をして わしめず の炉

聞說葛陂風浪惡　　　く 風浪 悪しと

許騎青鹿從行無　　　に騎して に従うことを 許すや無や

**送客之湖南　　　客のに之くを送る**

年年漸見南方物　　　年々 く見る 南方の物

事事堪傷北客情　　　事々 傷ましむに堪えたり 北客の情

山鬼趫跳唯一足　　　山鬼 す だ一足

峽猿哀怨過三聲　　　峽猿 哀怨して 三声過

帆開青草湖中去　　　帆は開いて 青草 湖中に去り

衣濕黃梅雨裏行　　　衣は黃梅に湿りて を行く

別後雙魚定難覓　　　別後 双魚は定めて覓め難からん

近來潮不到湓城　　　　近来 潮は に到らず

**送劉谷　　　　　劉谷を送る**

村橋西路雪初晴　　　の西路 雪 初めて晴る

雲暖沙乾馬足輕　　　雲 暖かに 沙 乾わき 馬足 軽ろし

寒澗渡頭芳草色　　　 芳草の色

新梅嶺外鷓鴣聲　　　新梅 嶺外 の声

郵亭已送征車發　　　 已に の発するを送る

山館誰將候火迎　　　山館 誰か候火をって迎えん

落日千峰轉迢遰　　　落日 千峰 転たたり

知君回首望高城　　　知る君が首を回して高城を望むを

**江上逢王將軍　　　　江上にて王将軍に逢う**

虬鬚憔悴羽林郎　　　す

曾入甘泉侍武皇　　　て甘泉に入り武皇に侍す

鵰沒夜雲知御苑　　　は夜雲に沒して 御苑を知り

馬隨仙仗識天香　　　馬はに隨いて香を識る

五湖歸去孤舟月　　　五湖 帰り去る 孤舟の月

六國平來兩鬢霜　　　六国 平らげ来る両鬢の霜

唯有桓伊江上笛　　　唯だ の 江上の笛のみ有りて

臥吹三弄送殘陽　　　臥してを吹き 残陽を送る

**和****皮日休酬茅山廣文 の茅山広文に酬ゆに和す**

一片輕帆背夕陽　　　一片の に背く

望三峯拜七真堂　　　三峯を望みてを拝す

天寒夜漱雲牙淨　　　天寒くして 夜 のきにぎ

雪壞晴梳石髪香　　　雪は壞れて 晴にのしきにる

自拂烟霞安筆格　　　自ら煙霞を払いて筆格を安んじ

獨開封檢試砂牀　　　独り封検を開いて砂床を試む

莫言洞府能招隱　　　言う莫かれ 能く隱を招くと

會輾飆輪見玉皇　　　会ならず をらせて 玉皇を見ん

**蒲津河亭　　　の**

宿雨清秋霽景**澄**　　　宿雨 清秋 澄み

廣亭高樹**更**晨興　　　広亭 高樹 更ににく

煙橫博望乘槎水　　　煙は橫う 博望が にぜし水

日上文王避雨陵　　　日は上る 文王が 雨を避けし

孤棹夷猶期獨往　　　 して を期し

曲**欄**愁絕每長**凭**　　　曲欄 愁絕して每ににる

思鄉懷古多傷別　　　鄉を思いを懷い 多く別れを傷む

此際哀吟幾不勝　　　此の際 哀吟してどえず

**感懷**

秋風落葉正堪悲　　　秋風 落葉 に悲しむに堪えたり

黃菊殘花欲待誰　　　黃菊の残花 誰を待たんと欲す

水近偏逢寒氣早　　　水近くして えに逢う 寒気の早きに

山深長見日光遲　　　山深くして に見る 日光の遅きを

愁中卜命看周易　　　に をして を

夢裏招魂誦楚詞　　　夢裏に魂を招きて をす

自笑不如湘浦鴈　　　自ら笑う のにからざるを

飛來**却**是北歸時　　　飛来たるは 却って 是れ 北に帰る時

**輞川積雨　　　　の積雨**

積雨空林煙火遲　　　 空林 煙火遅し

蒸藜炊黍餉東菑　　　を蒸し を炊きて に餉す

漠漠水田飛白鷺　　　たる水田に　 飛び

陰陰夏木囀黃鸝　　　陰々たるに ずる

山中習靜觀朝槿　　　山中の を觀じ

松下清齋折露葵　　　松下の を折る

野老與人爭席罷　　　野老 人と席を争うをむに

海鷗何事更相疑　　　 何事か 更にう

**石門暮春　　　　　の**

自哂鄙夫多野性　　　らう の 野性多きを

貧居數畝半臨湍　　　 ばに臨む

谿雲雜雨來茅屋　　　茅屋に来たる

山雀將雛傍藥欄　　　 を将いて に傍う

仙籙滿牀閑不厭　　　牀に満ちてにしてかず

陰符在篋老羞看　　　 篋に在りて 老いて 看るをず

更憐童子宜春服　　　更に憐われむ童子の春服に宜しきを

花裏尋師到杏壇　　　 師を尋ねて に到る

**酬慈恩寺文郁上人 慈恩寺のに酬ゆ**

袈裟影入禁池清　　　の影は に入りて清し

猶憶鄉山近赤城　　　おう のに近きを

籬落罅間寒蟹過　　　のに 過ぎ

莓苔石上晚蛩行　　　の石上に 行く

期登野閣閑應甚　　　に登らんと期して にしかるべく

阻宿幽房疾未平　　　幽房にして 未だ 平かならず

聞說又尋南岳去　　　く 又 を尋ね去ると

無端詩思忽然生　　　くも として生ず

**江亭晚望 江亭の晚望**

碧天涼冷雁來疎　　　 にして 雁 来ること なり

**閑看**江雲思有餘　　　に 江雲を看て 思い 余り有り

秋館池亭荷葉**後**　　　の の後

野人籬落豆花初　　　野人の 豆花の

無愁自得仙翁術　　　愁無くして ら得ん 仙翁の術

多病能忘太史書　　　病多くして く 太史の書を忘る

聞說故園香稻熟　　　く 故園 熟すと

片帆歸去就鱸魚　　　 帰り去りて に就かん

**漢南春望　　　漢南の春望**

獨尋春色上高臺　　　り 春色を尋ねて 高台に上る

三月皇州駕未回　　　三月の皇州 未だえらず

幾處松筠燒後死　　　のぞ 焼後に死し

誰家桃李亂中開　　　誰が家の桃李か 乱中に開く

奸邪用法**元**非法　　　 法を用う 元 法に非ず

唱和求才不是才　　　唱和して 才を求む 是れ 才ならず

自古浮雲蔽白日　　　えり 浮雲 白日を蔽う

洗天風雨幾時來　　　天を洗う風雨 か来たらん

**春夕旅懷 の**

水流花謝兩無情　　　水は流れ 花は謝し 両つながら無情

送盡東風過楚城　　　東風を送り尽くして楚城を過ぐ

胡蝶夢中家萬里　　　胡蝶夢中に 家万里

杜鵑枝上月三更　　　杜鵑枝上に 月三更

故園書動經年到　　　故園の書は　もすれば　年を経て到り

華髮春惟兩鬢生　　　の春は だ に生ず

自是不歸歸便得　　　自ら是れ帰らず帰らばち得ん

五湖煙景有誰爭　　　五湖の煙景 誰り有てか争わん

**長陵 長陵**

長安高闕此安劉　　　長安の 此に を安んず

附葬纍纍盡列侯　　　 として く 列侯

豐上舊居無故里　　　豊上の旧居 故里無く

沛中原廟對荒丘　　　の 荒丘に対す

耳聞英主提三尺　　　耳に聞く 英主 三尺をしと

眼見愚民盜一抔　　　眼に見る愚民 一抔を盜むを

千載豎儒騎瘦馬　　　千載の 瘦馬に騎し

渭城斜日重回頭　　　渭城の斜日 重ねてをらす

**咸陽懷古**

城邊人倚夕陽樓　　　城辺 人はる の楼

城上雲凝萬古愁　　　城上 雲はる 万古の愁

山色不知秦苑廢　　　山色は知らず の廃するを

水聲空傍漢宮流 水は空しく 漢宮にいて流る

李斯不向倉中悟　　　 にいてらずんば

徐福應無物外遊　　　徐福 に物外に遊ぶこと無かるべし

莫怪楚吟偏斷骨　　　怪しむ莫かれしてえに骨を断つを

野煙蹤跡似東周　　　野煙 東周に似たり

**過九原飲馬泉 九原のを過ぐ**

綠楊著水草如煙　　　 水にいて 草 煙の如し

舊是胡兒飲馬泉　　　れ 胡兒の

幾處吹笳明月夜　　　か を吹く 明月の夜

何人倚劒白雲天　　　何人か剣にる白雲の天

從來凍合關山路　　　從来 す 関山の路

今日分流漢使前　　　今日 分流す 漢使の前

莫遣行人照容鬢　　　行人をしてを照さしむることかれ

恐驚憔悴入新年　　　恐らくは驚かん して新年に入るに

**欲到西陵寄王行周 　西陵に到らんと欲してに寄す**

西陵沙岸回流急　　　西陵の沙岸 回流 急なり

船底黏沙去岸遙　　　船底 沙にして 岸を去ること 遙かなり

驛吏遞呼催下纜　　　 に呼びて纜を下せとし

棹郎閑立道齊橈　　　 に立ちて を斉えよとう

猶瞻伍相青山廟　　　猶おる 伍相 青山の廟

未見雙童白鶴橋　　　未だ見ず 双童の白鶴橋

欲責舟人無次第　　　舟人の 次第無きを 責めんと欲すれば

自知貪酒過春潮　　　ら知る 酒をりてを過ぎしことを

**洗竹　　　　　竹をぐ**

道院竹繁教畧洗　　　道院 竹繁くして ぼ がしむ

鳴琴酌酒看扶疎　　　琴を鳴らし 酒を酌んで を看る

不圖結實來雙鳳　　　図らず 実を結んで を来すを

且要長竿釣巨魚　　　つ要す の 巨魚を釣るを

錦籜裁冠添散逸　　　 を裁して を添え

玉芽**修**饌稱清虛　　　 をめ にう

有時記得三天事　　　時有りて す 三天の事

自向琅玕節下書　　　ら にいて 書す

**惜花　　　　　花を惜しむ**

皺白離情高處切　　　の 高処に切に

膩**紅**愁態靜中深　　　の 静中に深し

眼隨片片沿流去　　　眼はに隨いて　流れに沿いて去り

恨滿枝枝被雨淋　　　恨はに満ちて 雨にがる

總得苔遮猶慰意　　　総て 苔の遮ぎるを得ば 猶お意を慰さめ

若教泥汚更傷心　　　若し 泥をして汚さしむれば 更に心を傷めん

臨階一盞悲春酒　　　階に臨んで一盞 春酒を悲しむ

明日池塘是綠陰　　　明日 池塘 是れ 緑陰

**崔少府池鷺 の**

雙鷺應憐水滿池　　　双鷺応に憐むべし水の池に満つるを

風飄不動頂絲垂　　　風 れども動かず 垂る

立當青草人先見　　　立ちて 青草に当れば 人 先ず

行傍白蓮魚未知　　　行きて 白蓮にえば 魚 未だ知らず

一足獨拳寒雨裏　　　一足 独りむ 寒雨の裏

數聲相叫早秋時　　　風声 相叫ぶ 早秋の時

林塘得爾須增價　　　 を得て らく価を増すべし

況與詩家物色宜　　　や　詩家の　物色と宜しきをや

**鷓鴣**

暖戲煙蕪錦翼齊　　　暖くに戯れてし

品流應得近山雞　　　 応に得べし に近きを

雨昏青草湖邊過　　　雨はく 青草 湖辺を過ぎ

花落黃陵廟裏啼　　　花は落ち に啼く

遊子乍聞征袖溼　　　遊子 ち聞いて 湿おい

佳人纔唱翠眉低　　　佳人 かにいて る

相呼相喚湘江曲　　　相い呼び 相いぶ の

苦竹叢深春日西　　　の 深くして 西す

**緋桃**

短牆荒圃四無鄰　　　 に無し

烈火緋桃照地春　　　烈火の 地を照らす春

坐久好風休掩袂　　　坐 久しくして 好風に をうをれ

夜來微雨已霑巾　　　夜来の微雨 已にを沾おす

敢同俗態期青眼　　　敢えて と同じく 青眼を期せんや

似有微詞動絳脣　　　 の を動かす有るに 似たり

盡日更無鄉井念　　　 更にの念無し

此時何必見秦人　　　此の時 何ぞ必ずしも を見ん

**牡丹**

落盡春紅始見花　　　 落ち尽くして 始めて花を見る

花時比屋事豪奢　　　 を事とす

買栽池館恐無地　　　買いて に栽え 地 無きを恐る
看到子孫能幾家　　　看て 子孫に到るは くぞ

門倚長衢攢繡軛　　　門はにりて をめ

幄籠輕日護香霞　　　はを籠め を護る

歌鐘滿座爭歡賞　　　 満座 争って歓賞す

肯信流年鬢有華　　　肯えて信ぜんや 流年　に有るを

牡丹　　　　　　　牡丹

似共東風別有因　　　東風と別に 有るに似たり

絳羅高卷不勝春　　　 高く卷いて春に勝えず

若教解語應傾國　　　し 語を解せしむれば に 国を傾むくべく

任是無情也動人　　　 無情なるも た 人を動かす

芍藥與君爲近侍　　　と君と と為る

芙蓉何處避芳塵　　　芙蓉 何れの処か を避く

可憐韓令功成後　　　憐れむべし 功成りて後

辜負穠華過此身　　　にして 此の身を過ごせしを

**梅花　　　　　梅花**

呉王醉處十餘里　　　 酔う処 十余里

照野拂衣今正繁　　　野を照らし 衣を払い 今 にし

經雨不隨山鳥散　　　雨をるも 山鳥に隨いて 散せず

倚風如共路人言　　　風にりて 路人と言うが如し

愁憐粉**艶**飄歌席　　　愁てむ の歌席にえるを

靜愛寒香撲酒**樽**　　　静かに愛す のをつを

欲寄所思無好信　　　に寄せんと欲すれども 無し

爲君惆恨又黃昏　　　君が為に すれば 又